

教材としての『伊勢物語』二十三段考

早 乙 女 利 光

(例文)

A むかし、あなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでないありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざる間に女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしたれかあぐべきなどいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

B さて、年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽の中に隠れゐて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよく化粧じて、

うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君が一人こゆらむとよみけるを聞きて、かぎりなくなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

C まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものに盛りけるを見て、心うがりていかずなりにけり。されば、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るともといひて見いだすに、からうじて大和人、「来む」といへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ降る

といひけれど、男ますますなりにけり

一 本論文の目的

『伊勢物語』二十三段は、古典の導入教材として『国語総合』などの教科書に多く掲載されているが、取り扱いの難しさはしばしば指摘されるところであり、私が本稿をなす契機も授業で取り扱った経験から、どのように読めば良いかという切実な問題意識によるものである。当該章段を扱う際の問題は、高校一年生対象の『国語総合』に掲載されることが多いにも拘わらず、文章が平易な割には、内容は難解と言っても過言ではなく、従来、決着が図られていない問題がある点をどうすべきかということである。

その問題とは、まずは、「田舎わたらひ」を、「地方官」とするか「行商人」とするかであるが、これは章段の主題とも関わる重要な問題であり、二点目としては、高安の女の後日譚をどう読ませるか、である。後日譚とは、男が通わなくなつて以降、高安の女が、二首の和歌を詠んだことを言うのだが、明らかにこの話の中で異彩を放っており、「付け足し」とも捉えられている。この部分の解釈の難しさから、この部分を削除した省略版（冒頭に（例文）として挙げた本文A・B部分）を載せる教科書があるのが現状である。まずは指導書を通覧した上で、どこにテーマをおいて読ませることを意図されてきたかを見ていきたい。調査対象は、現行の『国語総合』および、旧学習指導要領の『国語Ⅰ』である。

指導書に見られる伊勢物語二十三段の主題

①男と大和の女の結びつきの深さを主題と捉えるもの

1 東京書籍「精選国語Ⅰ」（完全版）

- 2 明治書院「高校生の国語Ⅰ」（省略版）
- 3 大修館「精選古典Ⅰ」（完全版）
- 4 大修館「現代の国語Ⅱ」（省略版）
- 5 右文書院「改訂新国語Ⅰ」（省略版）
- 6 学校図書「基礎国語Ⅰ」（省略版） 第一段落のみ
- 7 東書「国語Ⅰ 古典編」（完全版）
- ②「みやび」を主題と捉えるもの
- 8 教育出版「国語総合」（完全版）
- 9 教育出版「新編国語Ⅰ」（完全版）
- 10 尚学図書「新選国語Ⅰ」（省略版）
- 11 尚学図書「新国語Ⅱ」（省略版）

③歌徳説話に主題を求めるもの

- 12 大修館「国語総合 古文編」（完全版）
- 13 大修館「新編国語総合」（国語総合 古文編）解説では、当初から大和の女に対する愛情がなくなったためではなく、経済的理由によって、高安に通い始めたこと、たしなみの深さの点で大和の女が優れていたからこそ、高安に通わなくなったことの一点に注目
- 14 旺文社「高等学校 国語総合」（完全版）（第三段を高安の女の悲しみが中心になっているかのような段とする）
- 15 ちくま「精選国語総合 古典編」（完全版）

- 16 日本書籍「新版高校国語Ⅱ 二訂版」(完全版)
 - 17 東書「精選国語総合」(完全版)
 - 18 東書「国語総合 古典編」(完全版)
 - 19 明治書院「新編国語総合 古文編」(省略版?)
 - ④ 壊れやすい男と女の関係のはかなさに焦点をあてるもの
 - 20 筑摩「新平安文学選」(完全版)
 - ⑤ 様々な愛のかたちに主題を求めるもの
 - 21 三省堂「明解国語Ⅰ」(完全版)
 - 22 三省堂「高等学校国語Ⅰ」(完全版)
 - 23 「新国語Ⅱ古文編」
- 指導書によって読み取らせたい点にはらつきがあり、十把一絡げに論じることが難しいが、現行の『国語総合』に限ってみれば、「みやび」と歌徳説話を主題とするものが多いようである。しかし「みやび」を主題として、「みやび」な男が「みやび」を基準として、高安の女を劣位に置き、大和の女を優位とする読み方で、フェミニズムが当然のものとして受け入れられている現代の生徒たちが納得するだろうか。私が授業を行った際の生徒の感想などは後に書くことにするが、まず言えるのは、二三段の男を、理想的な男とみなす生徒はほとんどいないということである。確かに、古典とは異質な存在であり、当時の社会制度と言った、外在的な諸条件を踏まえた上で読み取らせることは重要であろうが、我々が古典を教える際に考えなければならないことは、現代を生

きる生徒たちに、自分たちの生を考える契機を与えるようなメッセージを教材の中に見つけることである。それは何も古典作品を恣意的に解釈することではなく、多様な解釈コードの中で、教材のコードと言ふべきものを用いると言ふことである。

では、歌徳説話として理解した場合はどうか。そのように解釈した場合、この話は、生徒の実情からは遠く隔たったものとなつてしまふだろう。歌徳説話として解釈すれば、男は大和の女の、風吹けば沖つ白波立つた山夜半にや君が一人こゆらんという歌に感動して、高安の女のもとに通わなくなった、ということになるが、それでは高安の女の、

君があたり見つを居らむ生駒山雲に隠しそ雨は降るとも
君来むといひし夜に過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ降る

という二首の歌をどう解釈するのか。高安の女が必死の思いで詠んだこの二首の歌は、男を引き留めることはできなかったのである。歌徳説話的な話と取ると、歌徳はなぜ大和の女にだけ発揮されるのかということの説明しなければならない。その理由としては、優雅な大和の女と野卑な高安の女という点でなされることが多い。高安の女がいかに下品であるかを表すものとして、「けこのうつはものにみづからもりける」という行為が挙げられる。

我々教師は、この行為は下品な行為だと初めから思いこまされているのではないか。生徒からすれば、これはとても違和感のあることなのである。つまり、男のために飯を盛るといふのは喜ばれるのが当たり前だ、という素朴な疑問を持つ生徒が実に多いの

である。その疑問を、古典が読めていないと退けていいのだろうか。私は、その生徒達の素朴な疑問を大事にして、古典本文に立ち返り、今一度、『伊勢物語』二十三段について考えたいと思う。まずは、高安の女の、「けこのうつはものにもる」という行為をどう解釈するかを考えていくことにする。

二 (1)「けこのうつはものにもる」

まず、冒頭に掲げた本文の傍線部①を参照して頂きたい。この部分がどのように読まれてきたかについて、教科書編集に当たって、参照しているであろう小学館新編日本古典文学大系（以下、新全集）及び、岩波新日本古典文学大系（以下、新体系）の解釈を挙げる。

①新全集現代語訳及び頭注

・ たまたま、例の高安にやつてきてみると、この女は、男の通いはじめのころはおくゆかしくも粧をこらしたのだが、いまは氣をゆるして、手ずから杓子を取って、飯を盛る器に盛っていたのを見て、男はいやになって、行かなくなってしまう。

・ 侍女などに給仕をさせず、つつしみを忘れたさま。

②新体系脚注

・ 通いはじめのころだけは奥ゆかしげにつくろっていたけれど。
・ 氣を許し、くつろいで。
・ 直接自分の手で。
・ いやな氣持になって。

従来の解釈は、高安の女が当初の嗜みを忘れて、侍女などにさせるべき給仕をしたため、男は嫌になって高安の女のもとへ通わなくなつた、とするのが通説となっている。しかし、先にも述べたように、そのような解釈は疑う余地のない白明なものかどうかを考えているうちに、平安末期成立の『唐物語』中の「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」という話が目に入った。本文などの詳細は省略するが、話の内容を簡単に述べると、周囲から蔑まれるほどの醜い容貌の妻が、自ら夫に飯を盛るなど、かいがいしく夫の世話をしたので、夫は大変に妻を愛し、感謝していた、というものである。

『唐物語』作者は、当時、知識人として知られた人物であり、当然、『伊勢物語』も読んでいたであろうが、そのような人物が、『伊勢物語』二十三段とは違った解釈で、「けこのうつはものにもる」という行為を捉えていることは重視すべきであろう。また、最近の論考の中でも、高安の女の給仕を好意的に解釈するものもある。一つ引用しておこう。

実際には富裕であり、侍女を使うことができたにもかかわらず、高安の女が自ら敢えて給仕をしたのだとすれば、そのことにはどのような理由が考えられるだろうか。高安の女は、この給仕という行為が嗜みを欠く行為であるとは思っていないからではないだろうか。むしろ、現代の我々と同じく、自分の手で夫の給仕を行う行為こそが自分の妻としての役目であると考えたがゆえの行為ではなかったのだろうか

これは我々が見落としがちな点を述べた極めて重要な考察である

うと思う。そもそも、高安の女の給仕が下品であると明解に説明するのは、なかなか難しいと思うのである。

私は、男が高安の女を見限った理由を、高安の女の給仕に求めるのではなく、別のところにあるのではないかと考える。現行の解釈では、授業を行う際も、明解な説明ができず、生徒の素朴な疑問にも答えられないのである。

では、どこに理由を求めるか、であるが、最近、「けこ」自体の解釈が問題となっているので、その問題に言及してから、なぜ、男は高安の女を見限ったのかについて、私自身の解釈を述べたい。

(2)「筥子」か「家子」か

まず、現行の『伊勢物語』注釈書では、「けこ」を「筥子」として、基本的には「飯を盛る器」と解している。無論、平成十八年度版『国語総合』の採択見本も全て、「筥子」としている。しかし、長い間、疑問も持たずに行われてきた「筥子」説は、様々な疑問を生じさせることは、すでに論じられている。例えば、「けこ」に食器の意味はないとか、「筥子のうつはもの」では「うつわもの」のうつわもの」と同じ事を二度言っていることになる、などである。そして「筥子」説にとって最も決定的な打撃となったのは、「筥子」という解釈は、賀茂真淵が『伊勢物語古意』で根拠無く持ち出したものであり、それまでは家人や妻子を表す、「家子」と解釈されていたということであろう。そして、それ以降、「筥子」説は真淵の権威によって踏襲されていったにすぎないのである。

以上の点を考えれば、やはり、「家子」と解釈すべきであろう。「家子」と解釈した場合は、二つの解釈ができる。一点目は、「一家眷属の者のために飯を盛り分ける」であり、二点目は「男のために、家の者の器に飯を盛る」という解釈である。

どちらが妥当であるかの鍵は『唐物語』にある。

孟光は梁鴻に給仕したのであって、家の者のために飯をよそつていたわけではない。『唐物語』が成立した時は、「家子」説が通っていたと思われるから、「筥子」ではない。『伊勢物語』においても、「一家眷属の者」のために飯を盛っていたわけではなく、男のために、「家子のうつはもの」に飯を盛っていたと解釈したほうがよいのではないか。なぜならば、男が目の前にいる時に、家人のために飯を盛る必然性がないし、唐突に家人が出てくるのもおかしい。『唐物語』が『伊勢物語』を踏まえていると考えられる以上、孟光が夫の梁鴻に給仕していたように、高安の女も男のために飯を盛っていたとするのが妥当であろう。そのように解釈すれば、男は、「家子のうつはもの」に飯を盛られたことに嫌気がさしたということになる。

つまりは、男は高安の女の給仕自体に嫌悪感を覚えたのではなく、「家子のうつはもの」に盛られたことに辟易したのである。それはまさしく、男を家の一員として迎え入れるということだろう。半ば承継する関係にしようという意思表示こそが、「家子のうつはもの」に盛るという行為だったのではないか。用例自体がないので、実証するということは極めて難しく推測の域を出ないが、そのように考えれば全てすっきりするのである。

男が高安の女のもとに通わなくなったのは、幼い時から大和の女と強い結びつきがあり、高安の女のもとへ通ったのはあくまで経済的な理由である上に一時的なものであった。当然ながら、高安の女のもとに通い続ける気などなかったであろう。男が「家子のうつつはもの」に盛られた事に嫌悪感を抱くのも当然である。

そのように解釈すると、男を懸命に愛し、健気に奉仕した高安の女の一途さが読み取れ、それとは逆に、男のわがままさが浮かび上がってくる。それは、高安の女の給仕が下品だという理解に疑問を覚える生徒たちにもすんなりと受け入れられる解釈であろうと思う。いくつか感想をのせておく。

①愛情がないのに、高安の女のもとに通った男はひどい。

②偉そうに、どちらの女がいいか選ぶ資格がこの男にあるのか。

③せっかく尽くしたのに捨てられるなんて、高安の女のようにはなりたくない。

④男に対する愛情は大和の女より、高安の女のほうが上ではないか。

⑤当時の女性は男に振り回されてばかりだなあとと思った。

いずれの感想も至極当然のものである。

次に、高安の女が詠んだ二首の歌をどう理解すべきかを次に述べておく。

三 高安の女の二首の歌——二十三段における和歌の役割——

まず、教室で、大和の女の歌と高安の女の歌のどちらに心打たれたかを聞くと、高安の女の歌を挙げる生徒が半数以上いた。私

の勤務校が女子校なので、生徒たちは、やはり女性の立場から理解するのであるが、高安の女の歌を良いとする生徒が多いのである。大和の女の詠みぶりを優雅と感じ、高安の女よりすばらしいと思うのは、男の見方の方である。残念ながら男子校で教えたことではないので確かなことは言えないが、男子校、もしくは共学校に勤務されている先生方、いかがであろうか。

大和の女の歌は、技巧的にも特に目立つところはない。高安の女の歌も技巧的には単純だが、『万葉集』に類歌もあり下手な歌だとは言いい切れないのである。これが本末も合わぬ支離滅裂な歌であったならば、この章段の読み取りは容易なのだが、そうではない上に、畳み掛けるように二首続いている。なぜ高安の女に二首もの歌を詠ませているかを考える必要がある。二首続いているからこそ、こちらの胸に強く迫ってくるものがあるのも事実だろう。内容的にも、一首目は、「君があたり見つつを居らむ」から、来なくなった男を待ち続ける健気な女の姿がうかがえるし、二首目の、「頼まぬものの恋ひつづ経る」とは何と強い表現であることか。さんざん騙されて、もはや男をあてにはしていないが、それでも恋しく思わずにはいられない。光源氏が降嫁した女三の宮のもとに参っているときに、蕭々とした風が吹く冷やかな夜の気配を感じながら、身じろぎもせずにはいた紫の上の凄まじいまでの孤独感、疎外感を想起するのは私だけであろうか。

私なりの考えを示せば、高安の女の歌二首が存在している理由は、この章段が歌徳説話のような、歌徳を全面に押し出したものではないということを、大和の女と対比することによって

明らかにするためではないかと思う。男が高安の女のもとに通わなくなったのは、大和の女の和歌が優れていたわけでもなく、高安の女の和歌が劣っていたからでもない。大和の女の歌が優れていたならば、男は全く河内へ行かなくなるのが筋だと思いが、その後も男は河内へ通っているのであり、大和の女の歌も、歌徳というほどの効果を生じていないと考えるしかない。授業でも、どうして大和の女のもとに男が戻っていったのかを説明するのに、「大和の女の歌がすばらしかったから」などと言うのは、その後の生徒たちの抱く疑問にどのように答えたいのかを考えると、私の力量ではとても無理なのである。

それよりもどちらの女性も真剣に男を愛していて、その切なる思いが歌に託されているのだ、と説明したほうが、生徒たちも納得するだろう。大和の女の歌も、高安の女の歌もそれぞれ真実の思いが吐露されていることこそが重要なのであって、男を引き留められたか否かなどは全く問題になっていないと考える。

最近、中高生向けの短歌や俳句コンテストが盛んに行われており、我が校の生徒たちも、それぞれの学年の先生方の指導のもとに、かなりの数を応募しており、上位入選を果たすなどしている。彼女たちの作品を見ると、普段は表に表さない率直な思いが吐露されており、いつの時代にも和歌や俳句といった短詩型文学の重要性は同じなのだと強く感じた。そのようなことを踏まえると、歌徳といった歌の功利性よりも、自己表出手段としての和歌の効用を語った方が、二人の女に対する親近感も覚え、自分の気持ちを表すのに短歌を用いるのも悪くないな、と思わせることもできる

のではない。私が、冒頭で述べた教材のコードを用いた解釈とはこのような教育的な効果を狙った解釈を指している。

以上の考察を踏まえて授業を行ったのであるが、その際に生徒がどこに興味を持ち、どのような感想を持ったのかについて見ていきたい。

四 むすびにかえて——教材としての『伊勢物語』二十三段——

まず、実際の授業時の様子を記す前に、従来、『伊勢物語』二十三段がどのように取り上げられてきたかについて見ていくことにする。

『伊勢物語』二十三段は、『国語総合』では現代文編を除く全二十冊のうち、七社十一冊に採用されている。ちなみに『古典』『古典講読』には採択されていない。

旧課程では、『国語Ⅰ』に、現代文編を除く全二十三冊のうち、十二冊に、『国語Ⅱ』では全三十一冊のうち一冊、『古典Ⅰ』では全十九冊のうち一冊、『古典Ⅱ』には採択なし、『古典講読』では全十八冊のうち一冊に採択されていた。

二十三段が教科書に採録される場合、男が高安へ通わなくなるところまでが引用されている省略版と完全版の二種類があることはよく知られている。設問を見るとわかるのだが、教科書が読み取らせたいポイントは、「大和の女と高安の女を対比させた上での前者の嗜みの深さ」、「生活の豊かさよりも愛情の大切さに気づいた男の気持ちの変化」の二点であり、後半の高安の女の一首の歌はそのような読みかたからすれば必要ないという考えから、

省略ということになったのであろう。

旧課程では省略版を載せていたものが五冊あったが、『国語総合』で省略版を採用しているのは二教科書にとどまっている。しかしながら現行の指導書を通覧すると、完全版でも大和の女の嗜みの深さや、歌徳を説くものが多い。

完全版を採用すれば、高安の女の二首の歌をどう解釈するかという問題が出てくる。生徒に完全版を読ませた上で、大和の女の優位性を説明するのは至難の技であろう。実際、教室で読ませると、高安の女に好感を抱く生徒が多かった。いくつか例を示そう。

高安の女、もしくは男の対応に対する生徒の感想

①高安の女は男に尽くしたのに、どうして男は嫌になったのか、全く理解できない。

②大和の女は何だか飾っていて好きにはなれないが、一途に男のことを思う高安の女は好きだ。

③男は初めから財産目当てのような気がする。これではあまりに高安の女がかawaiiそうだ。

④男は単に高安の女に飽きただけではないか。もつともらしい理由をつけるのは、今の男も同じだなあと感じた。

⑤男は貴族ぶっているだけではないのか。のぞき見るなんて、やっていることは、高安の女より下品じゃないかと思

った。

教師は、『伊勢物語』Ⅱ「みやび」の文学、「昔男」Ⅱ「業平」という安易な図式をもとに授業を行っていたと思うのだが、素朴に二十三段を読めば、高安の女に好感を持つ生徒の心情は理解できるだろう。

相手の男のために給仕をする姿は、誠心誠意男に尽くす様子が伺えるし、男が通わなくなつてから切実な思いを吐露する歌を詠む姿からは、心底男を思う健気な様子をも読み取れる。

この読みを的はずれだと言えようか。高安の女に好感を持つ生徒を見て、私は、生徒たちが平安時代の困難な状況に置かれていた女性たちの真実の思いを理解できた、と感じたのである。それは古典を読むことが現代を生かすことにつながるということで、生徒たちは高安の女を通して、自分たちの生を見つめることができたとは私は考えている。ただ教室で読ませるときは、一定の方向性が示されなければ、教室は混沌としてしまう。

私が教室で読ませるとき心がけたのは、大和の女の優雅さを述べるのではなく、高安の女の思いの深さがどれだけ歌に託されているかを重視することである。その上で、大和の女の立場も非常に脆く、いつ高安の女の二の舞になるかわからないということを、当時の婚姻制度に言及して指摘するのがよいと考える。私は、さらに二十四段を読ませて、二十四段の女が大和の女の後の姿かもしれないことを指摘し、理解の徹底をはかった。元々、高安の女に同情する生徒が多かったためか、さほどの異論もなく受け入れられたと思う。二十三段全体を読んだ生徒の感想を最後に示す。

全体を読んだ生徒の感想

①大和の女と高安の女とどちらが好きかというよりも、男のわがままさを感じた。

②高安の女に同情する気持ちもわかるが、やはり大和の女の方が優雅な気がする。

③『伊勢物語』の主人公は業平だと思っていたが、この男はイメージしていた業平と違うので、業平が主人公ではない話あることがわかった。

④男が帰ってきた大和の女と、男に捨てられた高安の女の今後がとても気になる。

⑤初めは、大和の女が好きではなかったが、二十四段と併せて読んでみると、大和の女もかわいそうに思った。

生徒の読みはそれほど深まっていなかったが、古典という異質な存在に出会わせることで、現代に生きる自分の生を考えさせるという、私の授業をする上での目的を果たすことはできたと考えている。

以上の考察から、完全版を採用する傾向にある現行教科書を支持し、「家子のうつつはもの」と解釈することで、高安の女の給仕は下品なことではなく、男を家の一員に迎えようとする行為で、男に対する積極的な愛情の表出であったことを述べて、「みや

び」や歌徳をテーマとする現行の読み取り方では浮いてしまいがちな、高安の女の二首の歌にも積極的に言及した上で、功利的ではなく、詠み手の率直な心情を託す手段としての歌の重要性、いつ男に捨てられるかわからないと言いう意味での、大和の女と高安の女の立場の類似性を読み取らせる指導を提案したい。

注

(1) 秋山虔氏「伊勢物語私論」、『文学』一九五六・十一、岩波書店

(2) 松島毅氏「伊勢物語」筒井簡章段教材編『新時代の古典教育』所収、一九九・三、学文社

(3) 発表の席上、兼築信行先生より、「自身が携わっておられる某出版社の『国語総合』では「家子」説を採用した」と貴重なお話をお聞きしたが、おそらくは平成十九年度版からだと思われる。

(4) 竹岡正夫氏「伊勢物語全評釈」(一九八七、右文書院)や、山本登朗氏「伊勢物語の高安の女」『十三段第三部の二つの問題』、『国文学』関西大学国文学会、二〇〇四に詳しい。

(5) 奥村英司氏は、「伊勢物語」二十三段「和歌の力を超えて」(『物語の古代学——内在する文学史——』所収、二〇〇四、風間書房)で、二十三段の和歌を分析され、和歌の力の本質は、その功利性ではなく、人間のありかたそのものを言葉で表現できるところにあると述べておられる。極めて興味深い意見である。

(6) 手近にあるもので見れば、小西淳夫氏の「考えさせる古典の授業——『伊勢物語』筒井簡をめぐって——」(『早稲田大学国語教育研究16集』早稲田大学国語教育学会、一九九六)と題された実践報告がある。氏の豊富な経験に基づく意欲的な報告であるが、安易に男を業平である

としたり、この章段を、「女の歌の徳」によって男女の危機を乗り越える物語とするところは、いさゝか疑問を覚える。

*『伊勢物語』本文の引用は小学館新編日本古典文学大系によるが、私的に表記を改めたところがある。

*本稿は二〇〇五年度早稲田大学国語教育学会四月例会における口頭発表を基に作成したものである。席上、貴重な意見を頂いた文学部の兼築信行先生をはじめ、諸先生方に感謝申し上げます。